

2022年9月7日

留学報告書

南山大学長
ロバート・キサラ 殿

国際教養学部
准教授 北村雅則

研究課題：内省に表れる言語表現の質的研究
受入機関：東京大学大学院総合文化研究科 言語情報科学専攻
留学期間：2021年4月1日～2022年8月31日

2021年4月1日から2022年8月31日まで、東京大学大学院総合文化研究科の宇佐美洋教授の下で、(1) 海外在住日本人サッカー選手に現地での異文化適応の様子を長期的にインタビューし、ライフストーリーとして描くことと (2) 協同学習における振り返り手法とその教育応用の手法を追究することという2つの課題について研究を進めた。

研究活動の一環として、大学院の授業参加を通して自身の研究課題を深めつつ、ゼミに所属する大学院生たちの発表や質疑応答を通して、関連する領域に関する研究動向や自分が今まで使用したことがない質的研究の手法に関する知識を得ることができた。

(1) について、留学前の計画では海外在住の日本人サッカー選手を訪ね、練習・試合風景や日常生活等を観察したうえで、現地での適応状況について半年ごとにインタビューを行い、ライフストーリーの手法を用いて分析するつもりであった。しかし、コロナ禍にあって海外渡航が難しかったため方向転換をし、以前から蓄積してきた海外でプレーした経験のある日本人の元サッカー選手（現在は日本在住）のデータを基に、海外経験とセカンドキャリアへの影響性について分析を進めた。その結果として2022年1月『挑戦者たちが向き合った世界と言葉-ここではないどこかでサッカーをすること-』を上梓した。弊著では、海外でプロサッカー選手をするという経験を通して、そこでの自分の立ち位置やコミュニケーションのとり方、セカンドキャリアに自身の経験がどのように影響したかなどを新たにインタビューし、それらをもとに記述した。

コロナの状況が落ち着いた2022年2月から3月にかけて、海外在住の研究協力者である日本人サッカー選手を訪ね、データの収集およびインタビューを行った。日本からでは試合のダイジェスト映像やクラブが提供する画像しかデータを得ることができないが、現地では、試合中、味方選手とどのようにコミュニケーションをしているのかや相手選手や審判への抗議など、そこでしか知ることができない行動を目の当たりにした。それだけではなく、試合中の具体的な状況に置ける行動の意図を、記憶が新しいうちに日本人選手に聞くことで、その状況をより深く理解でき、こちらの思っていたこととは異なる思惑が働いていたことも知ることとなった。本研究課題の遂行のためには、現地におけるデータの

収集が不可欠であるため、コロナ禍にあっても、留学期間以後も見据えた研究データの蓄積を行えたことは非常に幸運であった。

(2) については、協同学習における相互評価のコメントを質的に分析するための方策について、宇佐美教授の下、知識の吸収に努めた。留学以前より、共同研究者とともに開発・運用している支援システム FishWatchr と FishWatchr Mini を用い、初年次教育におけるプレゼンテーション演習において相互評価を行う授業実践を展開してきたが、その成果の一端を 2021 年の日本教育工学会において「プレゼンテーションの相互評価に見られる相反するアノテーションの分析」というタイトルで発表した。また、同学会において共同で「遠隔環境におけるプレゼンテーション練習支援手法の検討」について発表し、コロナ禍において対面授業が難しくなった状況においても、また、対面・オンラインが入り交じる環境においても協調学習環境が整うような支援手法について提案を行った。

質的研究には代表的な研究手法が存在し、大枠が決まっているものの、分析の目的やデータの性質から分析の際には独自性が求められるものでもある。そのため、質的研究だけにこだわらず、以前取得したデータの中を量的にも分析したうえで、それでは補えない部分について、記述を中心に質的に分析を進めてきた。その結果を論文にまとめ、2023 年 1 月に刊行予定の『アカデミア 人文・自然科学編』第 25 号に掲載予定である。

「遠隔環境におけるプレゼンテーション練習支援手法の検討」の発表以後、授業実践における支援手法についての研究成果の公開はないが、今後、この発表を元にした授業実践を計画しており、そのための準備と環境の整備を行っている。特に、宇佐美教授の下で得た評価と態度の関係性という着想を実現すべく、共同研究者とともに既存のシステムの改修と新システムの開発を実行にうつしている。

1 年半という長きに渡り、研究活動に専念できたことは大変充実した時間となった。研究成果としては書籍 1 冊、論文 1 本、学会発表 2 件となるが、授業の参加やデータ収集のための海外渡航などを通して今後における研究の可能性を見いだせたことは大きな成果である。自分一人の研究活動や学会参加等では得られない着眼点や方法論に出会えたことは、腰を据えた研究を行える留学期間ならではの果実であり、これらを今後の研究活動に活かしていきたい。

【研究成果】

1. 北村雅則・山口昌也 (2021) 「プレゼンテーションの相互評価に見られる相反するアノテーションの分析」日本教育工学会 2021年秋季全国大会
2. 山口昌也・北村雅則・森 篤嗣・柳田直美 (2021) 「遠隔環境におけるプレゼンテーション練習支援手法の検討」日本教育工学会 2021年秋季全国大会
3. 北村雅則・石川美紀子 (2022) 『挑戦者たちが向き合った世界と言葉—ここではないどこかでサッカーをするということ—』、MALO PO MALO Project、269頁
4. 北村雅則 (2023 (予定)) 「スマートフォンを使用した相互評価に見られるアノテーション傾向と問題点の分析」『アカデミア 人文・自然科学編』第 25 号